

# 法王ベネディクト 16 世辞任

大ローマ布教所長  
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

2月11日午前11時41分、枢機卿会議の席上で、法王ベネディクト16世はラテン語で話し始めた。法王辞任の意向を表明したのだ。枢機卿達は信じられないと互いに顔を見合わせていた。話の内容は「神の前に何日も繰り返し、自分の思いを述べた。押し寄せる年の波で、聖ペテロに課せられた役割を果たすことができない。また、今はもう適任者ではないと確信したからである。」ということだった。

2005年4月19日に265代目の法王になったラッツィンガー枢機卿は、ベネディクト16世と名乗り、カソリックの最高責任者として、ローマ教会を、統括することになった。その時に既に78歳になっていた。

ラッツィンガーは、前法王ヨハネス・パオロ2世の側近中の側近だった。前法王は、後年パーキンソン病で苦しむが、その姿を見たラッツィンガーは我が苦しみにしたことだろう。2006年4月6日にラクイラで地震が起き、かなりの犠牲者と被害が出た。同年末、被災地を視察、慰問に訪れたラッツィンガーは同地に葬られている元法王チェレスティーノ5世の墓に参っている。

教皇史の中で、法王職を全うできなかったのは、265名の法王の中で、ラッツィンガーを含めて、わずか8名である。そのうち純粋な辞職は、チェレスティーノ5世(1294)と今回のベネディクト16世(2005～2013)の2名だけだ。法王辞任の最終例はグレゴリオ12世(1405～1415)まで遡る。

ベネディクト16世の辞任の理由はチェレスティーノ5世の宣言とよく似ている。それは、「現在の世界は色々な課題が急速に変わっていき、信仰の問題も揺らいできている。聖ペテロの船を操るためにも福音の宣教のためにも強力な体力と精神力を必要とする。それらの問題と対決するためには、私は年をとり過ぎ、さらに問題の解決への能力もない。」からだという。

法王ベネディクト16世は辞任発表後、2回の日曜日、アンジェルスをこなし、2月27日には最後の「一般謁見」を行った。翌28日午後5時過ぎにヴァチカンを離れ、カステル・ガンドルフの宮殿に入り、その町の住人に向かって、窓から最後の別れの挨拶をし、午後8時に宣言した通りに法王の任務から解放された。ラッツィンガーはそこで2カ月程過ごし、ヴァチカンに戻り、その領内の隅にある「隔離所」で生活を続けることになっている。2人の法王の存在と言う悪い影響を与えないように公の場所には現れないという。ただの信仰者として、十字架を背負った生活を続けていくという。

辞任発表後、前国務長官ソダーノが一番に法王に近寄り、抱擁し、頬に接吻した。ミラノの大司教スコーラ枢機卿は「晴天の霹靂」だと述べた。辞任のニュースは11時46分に直ちに各国語で世界に流された。ドイツのメルケル宰相は「皆が理解出来る決定だ。特に人生が長くなった今は…。」と述べた。イタリア大統領ナポリターノはラッツィンガーの勇気と近代性を誉め讃え「世界の人は聖職者のスキャンダルや側近の裏切りに苦しんだラッツィンガーを理解出来るだろう。」とむすんだ。

ラッツィンガーの辞職は病気が原因ではない。前任者達、ピオ11世、ピオ12世、ヨハネス23世、パオロ6世、ヨハネス・

パオロ2世なども任期半ばで辞任を考えていた節もある。特に、ヨハネス・パオロ2世の晩年はパーキンソン病に見舞われ、法王の任務の遂行に支障をきたすということ、辞任も考えていたようだが、「神の代理人」ということで最後まで勤めを全うしようとしたのだ。亡くなる3日前には直接信者に話すということで、準備され、書斎の窓から顔を表したが、結局声が出なかった。その哀れさは今でも思いだされる。

辞任の表向き理由は以上のようなのだが、裏の理由もあることだろう。それを挙げてみよう。

## 性的小児愛症

多くの聖職者がこの事件に巻き込まれたが、これはカソリックの大きな恥的部分だ。長い間、その問題に目をつむっていたが、マスコミの発達で、この問題が一気に吹き出し、ヴァチカンもやむなくその解決に向かって歩みだしたが、処罰が緩いという批判もある。今回のコンクラーベに参加することになっていたアメリカ人の枢機卿マホーニ氏は、事件に関与した神父をかくまったと暴露され、コンクラーベ参加を辞退した。

## 銀行問題

ヴァチカンの銀行はIORと言う。「宗教事業協会」の略だ。法王の銀行としてよく知られている。IORの責任者は、在家信者の銀行家、経営者が任命されていた。預金者は原則的に、聖職者、ヴァチカン勤務者と限られている。預金者の中には、イタリアの政界、財界の重鎮の姿もチラホラ見える。ダーティーマネーの集まる所となってしまったのだ。

## 側近の裏切り

法王ベネディクト16世の書斎から法王の手紙や法王宛の手紙、各資料が外部に流出したことだ。犯人はコルボ(カラス)と言われたが、逮捕されたのは、法王の身の回りを世話する執事のパオロ・ガブリエーリ一人だけだった。もっと仲間がいることだろう。

## 内部対立

前国務長官ソダーノ枢機卿一派と現国務長官ベルトーニ枢機卿一派との対立がある。2人は犬猿の仲。そのために、枢機卿会議を開いても、他の会議を開いても。この2派の対立で、結論に達しないのだ。大事な決定事項はいつも先送りされてしまう。



サン・ピエトロ広場